

雪の上での紫外線は雪面の反射によってアスファルト面の 3 割から 4 割も多い言う調査結果が発表された。

強い紫外線は皮膚だけでなく目にも悪影響を及ぼす。角膜の細胞が壊死し皮が剥けた状態になり激しく痛む雪目炎になる。

< ゆきめの話し >

2005.12.25 和久井伸一

子供のころ黙々と 3 メーターも積もった雪がやっと止んで、春になりかけたころの晴天の日に朝から晩までスキーを楽しんでいた。調度そのころよく雪目になった。

朝からきらきらと光る雪の結晶の反射を浴びて顔を真っ黒にしてスキーをして遊ぶ。やっと昼ご飯のときに家に入るが家の中が闇のように暗くてしばらく見えない

目が慣れてくると囲炉裏の回りが見えはじめ暖かい炭コタツに潜る。炬燵で暖められているおひつのご飯と湯気が出ている味噌汁とおいしい鮭の大根煮そして沢庵と漬け菜（野沢菜）でご飯を食べる。一休みしてまたスキーを履いて、家の後ろのみんなで踏み固めて作ったスキー場でスキーが始まる。ジャンプをしたり、転んであちこちにできた大きな穴を埋るのは、子供たちみんなの協働作業であった。男の子も女の子もみんなでスキーを楽しんであつというまにだんだん日が暮れてくる、また雪が凍ってスキーががりがりによくすべるようになる。真っ暗になってお月様が出始めるとスキーを脱ぐ、皮の留め具フィットは凍みて針金のようになかなか外れない。スキーをあわせてたたいて雪を落とすが凍みついた雪は硬くくっついて落ちない。エッジに手袋がくっつくと手袋が取れなくなって、くっつけたまま囲炉裏に持ってきて雪を溶かす。

囲炉裏で手と足を温めると雪でぬれて凍みたズボンから湯気が立ち上がる。

白い息をしながら濡れた服を脱ぐ、^{とりはだ}鳥肌の体で風呂に入るが暑くて入れない、「うめる」というという、「あつたまれば兆度よくなる」とおこられる。しばらくじっと我慢をすると風呂の温度は調度よく感じてくる。テレビもラジオもまだないから食事のときみんなではよく話した。炬燵に入るとあつたかい甘酒をおばあさんがくれる。体の心まであつたまる。昔話を聞いて瞼がくっつく。「ねろてが」と促がされて、行火のある壊まきの布団に頭まで潜る。調度眠るころになると霜焼けで赤くはれていた手と足の指がかゆい。目がちょっと痒くなってひりひりしはじめる、めをこするが、遊んだ体はすぐ眠くなる。

ゆっくり休んでまた朝になるが^{めやに}自脂目やに目がくっついてしまって開かない、みんながスキーで遊ぶ声が聞こえる、急いでスキーを履いて外に出る。お日様がだんだん上にあがってくる、そのうちまぶしくて目があけられなくなってしまふ。真っ赤になった目は雪目だ。

さあ大変だ2,3日天気の良い火はまぶしくてスキー遊びはできない。仕方なく炬燵に頭まで潜って。一人でぶつぶついいながら寝る。弟がスキーから帰ってきて雪のような冷たい足でもぐってくる。冷たい！！

自分の専用の炬燵だあちに行けと蹴飛ばす、負けずと弟も蹴飛ばす。1回2回3回とやりあう。いじめたと弟が母に招^{まね}る(仲裁に呼ぶ・言付ける)。ゴツンとくる。悔しくてまた布団にもぐる。そういう幼い時代であったことをおもいだす。